様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月２１日現在

機関番号：34407
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2011
課題番号：21520298
研究課題名（和文）『キリストの生涯の黙想』が１５世紀の大衆思想に与えた影響について

研究課題名（英文）*Meditationes Vitae Christi* and the Fifteenth-Century Popular Thoughts

研究代表者
田口　まゆみ（TAGUCHI　MAYUMI）
大阪産業大学・人間環境学部・教授
研究者番号：30216832

研究成果の概要（和文）：
１４世紀中ごろから１５世紀後半にかけて全ヨーロッパで流行した、キリストの生涯について「黙想」するという信仰方法が成熟した結果、一般信徒の信仰形態は個人充足的傾向を強めていった。それは信仰の自立を促す一方、教会と王権間の実権交代という社会の権力構造の変化も伴った。この信仰形態の圧倒的な伝播力と影響力は、キリスト・マリアに対する共感と崇敬を鼓舞することを重要な手法とする「黙想」という信仰の形が、生物学的に心身の相関関係を活性化させる構造を持っていたことにも起因していると言える。末期中世の情緒的信仰主義（affective devotionalism）においてしばしば報告される神秘体験も、一部この脳活動として説明しできるであろう。キリスト・マリア崇敬は、写本文化の終焉を華やかに飾ったという点でも重要である。

研究成果の概要（英文）：
This project sought to consider the multifarious influences of the Pseudo-Bonaventuran *Meditationes Vitae Christi* upon late medieval lay piety and the development of popular thoughts, specifically from these two aspects: (1) neuro-biological analyses of the use of certain terms and expressions typically attributable to this kind of devotionalism through Nicholas Love's adaptation of the *MVC*, *Mirror of the Blessed Life of Jesus Christ*; (2) material analyses of some compilatory manuscripts; specifically, Pepys Library MS 2125, Magdalene College, Cambridge, which includes a version of Middle English translation of the *MVC* (this study is to develop in my new editorial project for the Middle English Texts series [Heidelberg]).

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
総　計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学
キーワード：英文学、思想史、文献学、認知理論、中世

１．研究開始当初の背景

(1). 脳神経科学に立脚した認知論的論考が文学の領域でも脚光を浴びだしていた。中世英文学の領域では萌芽時期であった。

(2). 偽ボナヴェンチュラ作『キリストの生涯の黙想』およびその中英語訳についての研究が活性化しつつある時期であった。

(3). 研究代表者は後期中世の宗教文献および聖書の翻訳について特に写本研究として継続して研究していた。Nicholas Love による『イエス・キリストの尊い生涯の鏡 (*Mirror of the Blessed Life of Jesus Christ*)』（偽ボナヴェンチュラ作『キリストの生涯の黙想』の中英語訳）も長年の研究対象であった。

２．研究の目的

(1). 末期中世の情緒的信仰主義（affective devotionalism）では、往々にして常軌を逸した情動的および身体的変化が特徴的に表れ、神秘体験として自覚するケースも多かった。多くの情緒を意図的に注入する、この信仰形態における情緒的および身体的変が、随意的かつ不随意的な脳と身体の相互作用がもたらしたと想定し、脳神経科学的認知論を応用して考察する。

　さらに、15 世紀イギリスにおける偽ボナヴェンチュラ作『キリストの生涯の黙想』の需要と影響について、特に大衆思想の発展に果たした影響について考察する。

(2). 中世末期の写本文化について、特に宗教文献のコンピレーションあるいはアンソロジー写本がどのような特徴を持っていたか、『キリストの生涯の黙想』の英語訳がどのような形で伝播したかという点を含めて、調査・考察する。

３．研究の方法

(1). 脳神経科学的分析 : Nicholas Love による『イエス・キリストの尊い生涯の鏡』に用いられた、情緒的信仰主義（affective devotionalism）に特有の用語や表現の種類、分布、頻度を分析し、脳神経科学的認知論を応用した考察を加え、この信仰形態に特有の情動および身体の変化が発生する生態的仕組みが、言語上でどのように表れているかを検証した。

　分析には、特に Antonio Damasio のソマティック・マーカー仮説、ミラー・ニューロンの発見、Dawkins のミーム理論、ヴァーチャル・リアリティに関する研究を援用した。

　ソマティック・マーカー仮説によれば、情動に対する刺激は、情動（発汗、涙などの身体的変化）を経由して感情を引き起こし、これらの変化は感情の知的認知につながる。これらの相互的、相乗的作用は、自然的にも働くが、感情・情動を増幅させようという意図が働いた場合、この相関作用は大きな身体的変化につながると想定した。

　Damasio の仮説は以下のように簡略図式化できる。

1. 情動を誘発する刺激
　　⇓
2. 情動　(身)
　　↕
3. 感情　(心)
　　↕
4. 知覚 ➔ 高い理性　(知)

　ミラー・ニューロンとは、ある行為を見たり、聞いたり、想像したりしただけで、実際にその行為を体験しているかのように運動ニューロンを活性化させる脳細胞につけられた名称である。この脳細胞の働きを、キリストの生涯を想像するという信仰形態が誘発する身体変化の説明に援用した。

　ミーム理論は、「まねる」、ミラーするという行為の伝染力が文化の伝播に果たした役割を説明する。つまり、キリストを「まねる」ことを言語化して明白にしかも強く奨励・命令する信仰形態は、構造的に高い伝播力を持っていると言える。

　さらに、コンピューター上でのヴァーチャル・リアリティのもたらす影響に関する研究も、キリストの生涯を想像し、そこに参加するという信仰形態のもたらした影響に関する考察に援用した。

(2). テキスト批評：偽ボナヴェンチュラ作『キリストの生涯の黙想』のラテン語原典といくつかの英語訳を詳細に比較した。近代における自我の誕生や個人主義の萌芽に貢献したと考えられる特徴が本文にどのように表現されているか、またその表現が読み手（聞き手）にどのような影響を与えうるかについて批判的に考察した。

(3). 文献学的考察：『キリストの生涯の黙想』の中英語訳の一つが、Cambridge 大学 Magdalene College, Pepys 図書館 2125 写本に収録されている。この写本は後期中世に作られた宗教文献のアンソロジー写本である。アンソロジー写本では、一緒に収録されている作品間の関連性が、写本全体のテーマを理解するための重要なファクターとなる。加えて、写本の素材、製本上の証拠、字体の変化などの情報を重視する material philology に立脚して考察する。関連して、類似した、15 世紀のアンソロジー写本との比較を行う。また、この中英語訳の翻訳元となったラテン語『キリストの生涯の黙想』写本を特定化するための作業とし

て、写本間の異同を比較・検証する。

４．研究成果

(1). 情動（身）、感情（心）、知的活動が互いに不随意的に影響を及ぼしあう関係、また五感を通して感知される情報により運動細胞が不随意的に活性化する脳内システムが、情緒的信仰主義（affective devotionalism）における情動および身体の変化に深く関わっている可能性を確認した。特に、『キリストの生涯の黙想』は、キリストの生涯における様々な状況や出来事を「心の目で見て」、生々しく頭の中で再現し、黙想者自身があたかもその場に居合わせているかのように想像することを繰り返し指示する。言わば脳内に映像化されたストーリーに、自ら出演することによって、キリストやマリアとストーリーを共有し、共感を喚起することを目標とする。テキスト的には、感情や情動を意図的に、加速的に活性化させることが「stir」（感情・情動をかき立てる）という動詞とその名詞形、および感情や情動を表現する言葉、また「火をつける」、「（内臓が）熱くなる」、「とろける」などといった言葉を用いて奨励される。この仕組みを上記の Damasio 仮説の図式は自動的に起きる身→心→知の連動を表しているが、キリストの生涯を黙想する情緒的信仰は、この連動の各段階を言語化して命令したり、目標として定めたりしつつ、刺激の方向および結果として起こる変化を「stir」という言葉で言語化していると説明できる。言語化された誘導因子は、特に物語の導入部分に集中して効果的に配され、心・知・身を統合的に投入する信仰に自然に入ってゆけるように構成されていることが確認された。感情を煽る表現は、誘発される身体的変化の描写も伴っており、黙想の実践者は、生態的に連動している頭と心と身体の変化の正当性を確認しながら、この信仰の実践を深めてゆくことができるようになっていると言える。その結果生じる情動的および身体的変化は、個人間で程度の差はあれ、実践者の誰でも経験することができたと考えられる。さらに、時には予想外の（あるいは望んだ）変化に結びつき、その変化は神秘体験として自覚されることが多かった。こうした現象は、中世のみならず現代においても認められ、ピエール・ジャネは、類似のケースを精神医学的症例として扱っている。

情緒的信仰主義（affective devotionalism）が近代における自我の誕生に貢献したという近年の見方との関連では、キリストの生涯を黙想するという信仰形態が、内へ内へと向かい、司祭や学問の仲介を必要としなかったという、自己完結的な特性があることに表れている。この特性をテキストで確認し、同時に、上に概略したような、心・知・身の生物学的相乗作用との関連で考察した。

自分が創造した想像世界に自分の分身を登場させ、動かし、その世界での出来事を体験させるこの信仰形式とそれに伴う心身現象は、21 世紀社会に圧倒的速度で広がっているヴァーチャル・リアリティ体験と符合させて考えることができる。

キリストの生涯を黙想するという信仰の形が、14－15 世紀ヨーロッパ全域に広がったスピードと影響力の大きさは、この信仰形式が、強力なミームとしての素質を備えていたことと関係づけられる。

これらの成果については、脳神経科学分野の国際学会(2009)および中世英文学分野の国際学会(2010)で発表し、後者の議論を発展させた論文は、国際的学術雑誌に受理された。

(2). 『キリストの生涯の黙想』は全ヨーロッパで多くの写本が作られ、翻訳され、当時の宗教美術にも大きな影響を与えたが、イギリスでは、その受難部分が人気を得て、その部分のみのラテン語写本が流布し、その部分のみの英語訳も多く作られた。英語訳のうち、唯一全本の翻訳である Nicholas Love による『イエス・キリストの尊い生涯の鏡 (*Mirror of the Blessed Life of Jesus Christ*)』については、上記（１）の分析の対象として詳しく論じた。この中英語訳については、日本語訳の準備を進めてきた。

受難部分の中英語訳のうち、Pepys 2125 写本に収録されている作品については、ラテン語原典と照らし合わせて、加筆および削除部分の特徴を分析し、国際学会で発表した（2010）。この時の論文を修正・発展させた論文は、学会プロシーディングズに受理された。また、同テキストと Pepys 2125 写本全体のマテリアルな特性と絡めた需要者論を国際学会で発表した（2011）。この時の論文はマテリアル・フィロロジーに立脚して発展させ、同学会プロシーディングズに受理された。

(3). 後期中世の宗教文献アンソロジー写本のマテリアルな特性については、上記のように、特に Cambridge 大学 Magdalene College, Pepys 図書館 2125 写本を中心に展開した。この写本は、多分富裕なバックグラウンドを持つ男性隠者のために作られたと考えられる写本と、男子修道院で作られて使用された写本とを、後に合本にしたものであると考えられる。写本途中に、欠如した部分が数か所にあり、それらが故意に削除されたものなのか、その他の理由によるのかは断定できないが、異端の嫌疑を避けるために削除された可能性に

ついて、２，３の先行研究がある。今回の調査では、写本の作成・製本時に挿入されたフォリオ番号と折丁記号の特殊な配列や、落丁部分前後の本文の検証などによって、落丁にいたった理由を考察し、おそらく写本の損傷が一番説得力ある説明であるという提案をした。

この写本に収録されている 50 以上の作品のテーマ的連続性・統一性についても照査し、少なくとも 15 世紀末まで、キリストの生涯についての黙想が、男子修道者の間でも好まれ、実践されたことを報告した。

また、Vernon, Simeon といった著名な同時代のアンソロジー写本とも比較し、多くのアンソロジー写本が部分的に密接な関係を持っていることを確認した。この点については、今後も研究が進められなければならない。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

1. 2012 “Mirroring Christ as a Meme”, Mayumi Taguchi, Postmedieval: a journal of medieval cultural studies, 3.3, “Cognitive Alterities/Body-Thinking/ Neuro-medievalism”, ed. Jane Chance and Antony D. Passaro, forthcoming. （査読有）

〔学会発表〕（計 5 件）

1. 2011 “Readers and Owners of the Two Parts of Cambridge, Magdalene College, MS Pepys 2125”, Mayumi Taguchi, *Out of Bounds: Mobility, Movement and Use of Manuscripts and Printed Books 1350-1550*, Twelfth Biennial Conference of the Early Book Society in Collaboration with Twelfth York Manuscripts Conference in Honour of Professor Toshiyuki Takamiya (York, UK, July).
2. 2010 「Pepys版『キリスの受難の黙想』の校訂に向けて」田口 まゆみ、家入 葉子、日本中世英語英文学会第 26 回全国大会 (大阪学院大学, 12 月).
3. 2010 “Mirroring Christ as a Meme“, Mayumi Taguchi, *The Seventeenth Biennial International Congress of the New Chaucer Society* (Siena, Italy, July).
4. 2010 “The Pepysian Version of the Middle English *Meditationes de Passione Christi*”, Mayumi Taguchi, Yoko Iyeiri, *Mapping Late Medieval Lives of Christ,* Geography of Orthodoxy (Belfast, UK, June).
5. 2009 “Embodied Reason: the Mechanics of Spiritual Self-Generation in the English Versions of the *Meditationes Vitae Christi*”, Mayumi Taguchi, *Toward a Science of Consciousness 2009: Investigating Inner Experience Brain, Mind, Technology* (Hong Kong, China, June).

〔図書〕（計 3 件）

1. forthcoming “The Pepysian Meditation on Christ’s Passion”, Mayumi Taguchi, in *“Diuerse Imaginaciouns of Cristes Life”: Devotional Culture in England and Beyond, 1300-1560*, ed. Stephen Kelly et al. (Frankfurt am Main: Peter Lang). （共著、査読有）
2. forthcoming “Devotional Terms and the Use of the Bible in Nicholas Love's *Mirror of the Blessed Life of Jesus Christ*”, Mayumi Taguchi, *Proceedings of the Sixth International Conference on Middle English*, ed. Richard Dance and Laura Wright (Frankfurt am Main: Peter Lang). （共著、査読有）
3. 2010 *Historye of the Patriarks*, ed. Mayumi Taguchi, Middle English Texts vol. 42, Heidelberg: Universitätsverlag, Winter.

６．研究組織

(1)研究代表者
田口　まゆみ（TAGUCHI MAYUMI）
大阪産業大学・人間環境学部・教授
研究者番号：30216832

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：